

## 地域イベントにおけるデジタルアートを活用した地域の魅力発信 (野々市じょんからまつりでの「じょんからプロジェクションメッセージ」の実施)

指導教員 金沢工業大学 情報フロンティア学部 教授 松林賢司  
参加学生 中山僚太・稲垣寛人・大平将也・小川謡・香林亜実・石倉久瑠美・吉村一哉  
澤田翔吾・吉川友洋・鈴木崇弘・草間大迪・鈴見侑大・徳山智紀・渡邊秀哉  
早野詩織・中村結衣・三宅真生・永井涼雅・柴田成輝・廣瀬由和・若竹航輝  
和田淳希

### 1. 活動の成果要約

本活動は地域イベントにおけるデジタルアートを活用した地域の魅力発信を目的として、野々市市で開催されている野々市じょんからまつりで来場者の写真と花火の映像を野々市小学校校舎の壁面にプロジェクションする「じょんからプロジェクションメッセージ」を実施した。今回の企画の参加者は2日間で約150名となり、じょんからまつり全体でも来場者が増加した。じょんからまつりの来場者が増加したことで、野々市市の魅力発信に貢献できた。

### 2. 活動の目的

課題である地域イベントにおけるデジタルアートを活用した地域の魅力発信を解決するために、以下の目的を立てて活動を行った。

- ①野々市市の町興しイベントへの市内外からの参加者増加
- ②野々市市の町興しイベントの魅力アップ、ブランド化
- ③野々市市の町興しイベントを通じた地域住民との交流活性化
- ④担い手不足の野々市市の町興しイベント運営への参加・貢献
- ⑤野々市市役所の大学専門知識：マーケティングテクノロジーの習得・活用

### 3. 活動の内容

野々市市を代表する夏の一大イベントである「野々市じょんからまつり」に対象を絞り、金沢工業大学・DK art caféプロジェクトのデジタルアート技術を活用した企画により、イベントへの来場者数の増加を図り、じょんからまつりの名物・ブランドとして本企画の今後の定着を目指した。

野々市市と協議の上、じょんからまつりの来場者にメッセージボードを持ってもらった写真と花火の映像を野々市小学校校舎の壁面全体をスクリーンとしてプロジェクションする「じょんからプロジェクションメッセージ」を実施した。

詳細な活動内容は下記の通りである。

#### ①企画立案のためのブレスト等（5月）

じょんからまつりの来場者数を増加させ、地域の魅力を発信できるような企画を考案した。さらに、その企画を今後行うために、じょんからまつりの名物・ブランドとするにはどうしたら良いかプロジェクトメンバーと話し合った。

そのブレストの結果、じょんからまつりの印象を来場者に強くもってもらうために、メッセージボードを持ってもらった来場者の写真を撮り、その写真をスライドショー形式でプロジェクションする来場者参加型の企画「じょんからプロジェクションメッセージ」を立案した。また、子どもたちの注

目を集めるために、花火の映像をデジタルアートとしてプロジェクションする案も出た。

この2つのデジタルコンテンツは、野々市小学校校舎の壁面をスクリーンとして同時にプロジェクションすることになった（写真1）。

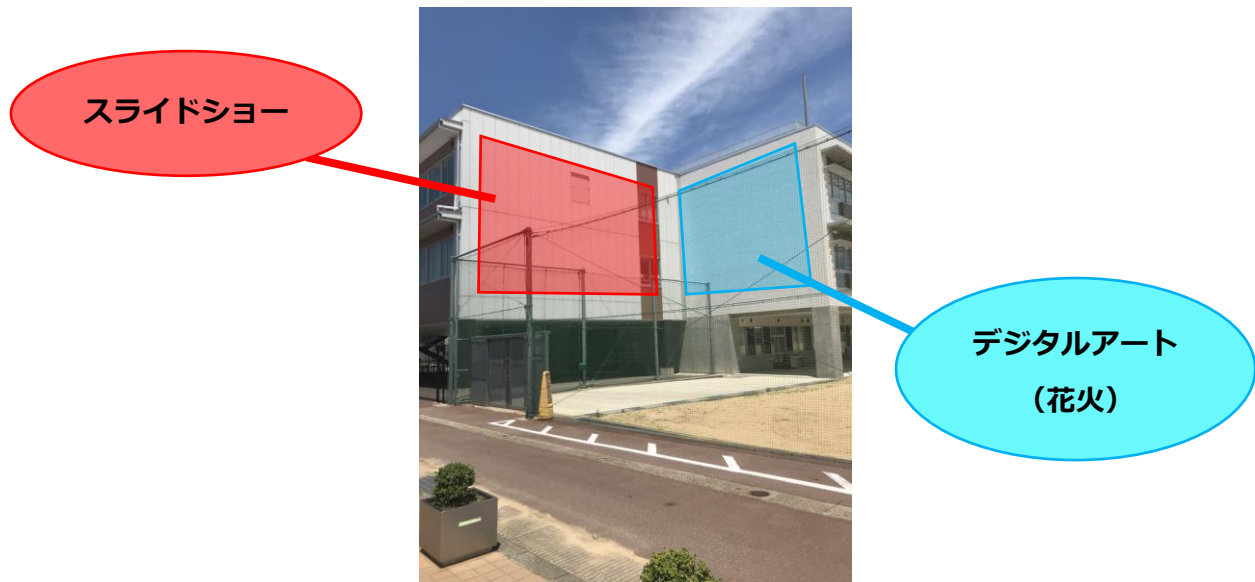


写真1 野々市小学校校舎壁面

## ②企画ニーズ調査アンケートの実施（6月初旬）

本プロジェクトで立案した企画を野々市市に提案し、企画ニーズの調査を行った。

## ③デジタルコンテンツの制作、リハーサル、PR（6月中旬～7月）

写真をプロジェクションしたときに、顔がはっきりと映るようにしたり、花火の映像を迫力のあるものにするため、デジタルコンテンツはリハーサルも行いながら制作した（写真2）。

また、さらなる来場者数の増加を目指すために、ポスターを制作し、SNS等でイベントのPRを行った（写真3）。



写真2 リハーサルの様子



写真3 ポスター

## ④じょんからまつり当日（7月28、29日）

じょんからまつり当日は、来場者にかいてもらったメッセージと一緒に写真を撮り、その写真をスライドショーに追加していく仕事を行った（写真4、5）。スライドショー、花火のデジタルアート共にうまくプロジェクションすることができた（写真6）。



写真4 写真を撮っている様子



写真5 写真を追加している様子



写真6 実際のプロジェクション風景

## 4. 活動の成果

「じょんからプロジェクションメッセージ」は2日間で約150名の参加があった。今回の企画は親子連れを中心に子どもたちにとっても人気があり、たくさんの方々に参加してもらえた。

また、じょんからまつり全体でも来場者数が増加し、本活動の目的である野々市市の町興しイベントへの来場者数の増加を達成することができた。さらに、来場者参加型の企画にしたことによって、自分の姿が大画面のスクリーンに映っているのを背景に、参加者自らがその様子を写真に撮り、SNS等で発信してくれたこともあり、より多くの人に野々市市の町興しイベントの魅力を伝えることができた（写真7）。

「野々市じょんからまつり」という伝統的なイベントにデジタルアートという近代的な技術を用いた企画を提供したことにより、野々市市の町興しイベントのマンネリ化を防止し、イベントの魅力アップ、さらにはブランド化に貢献することができた。



写真7 自分の姿がプロジェクションされているのを背景に写真を撮る参加者

## 5. 次年度の計画

本活動の継続実施により、本プロジェクトが目指すじょんからまつりへの集客を恒常化するために、次年度に実施する企画の立案、その準備活動を行う。

## 6. 活動に対する地域からの評価

じょんからまつりへの来場者数が増加し、たくさんの方々に「じょんからプロジェクションメッセージ」に参加してもらえた。参加者にアンケートを取った結果、今回のような自ら体験できる参加型の企画にまた参加したいという声がたくさん出た。

また、担い手不足である野々市市の町興しイベントの運営に学生が参加したことによって、これからの担い手となる若手の育成に貢献できたことに対して、高い評価を得た。